

詞乃多図記について

建部一男

○概観

○欄内の記述について

○欄外の記述について

「詞乃多図記」の内容について資料紹介の形で、簡単に概観して行きたいと思う。

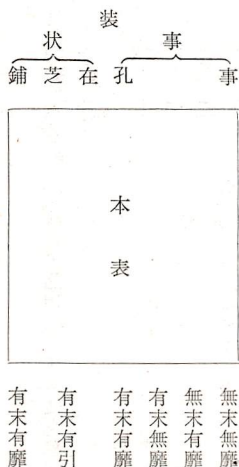
○概観

詞乃多図記は横^{54.4}×縦^{37.0}センチの横長の折図で、横に八折縦に二折して表紙に当る所に^{2.2}×^{13.2}センチの白紙をはり、「詞乃多図記」と木版刷りしてある。

この折図は弘化三年、上田真具の名ででている。著者については、ほとんど現行の国語学史書に紹介がなく、国語学辞典(p. 986・書名索引 p. 56)の「装図」の部に装図の研究者として詞多^{ツダ}図^{ヅキ}記^キともにも名が見える。この詞多図記が今紹介する詞乃多図記と同一のものかどうかは明らかでない。欄外左下にかかれた注によると、「こ^{注1}とばのたづき」とよむべきであろうと思う。近世末期に、本居派にあつて、「詞の玉緒」以来、「詞の……」と称する語学書が次々と

詞乃多図記について

出されたことは周知のことである。富士谷派から出た書の名としては特異である。体裁としては、右端に本から下へ、末・引靡・往・目・来・靡伏・伏目・立本の段を設け、上端には居から左へ、来・為・寝・得・見・打・思・捨・落・恨・越・有・遙・早・恋の十六例語がある。そしてその語の活用語尾に当るものが、それぞれの該当欄に書かれていることは装図と一致している。ただ、伏目・立本は早・恋の部にしかなく、それ以外の例語には欄も設けていない。そして本表の上と下には装図のような



という分類を施していない。

○以下、一二本稿での用語・略称の類について記す。原文中に記述された著者の注などについては、特別のものを除いて「記

入」とする。その他は左の——に従う。

○書名略称とその出典。

記——「詞乃多図記」

装——「あゆひ抄おほむね・下

九ウ十オ・装図・富士谷

成章・安永二」

譜——「活語断続譜・時枝誠記

国語学史 7, 62 の写真・

鈴木胤・(神宮文庫本)」

説——「活語断続図説・古田東

朔国語学 43, p. 96・鈴木

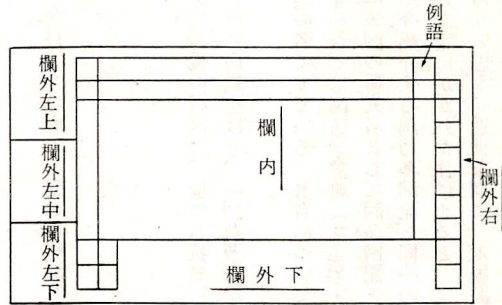
木胤」

八——「四種の活の図」——「詞八

衢」上四ウ五オ・本居春

庭・安政三・改正本」

略——「表」——「詞通路」上五オ——八オ・本居春庭・享和一刊本」



○欄内の記述について

(1)装とくらべると、もつとも大きい差は概観にのべた通り例語の活用形式による上位分類のないことであるが、そのほか、欄内記入が多いことも特色である。国語学辞典に研究書とあるのもそのためであろうか。本居宣長の紐鏡に対する玉の緒というより、義門の「活

○装図を基にし、右の諸表と比較して見て行く。

語指南」の如き内容を表中各所に書き入れた形式である。その記入は、あるいは接続の辞、あるいは用例や用語説明などいろいろである。

(2)最上位の例語のわくの中に縦書で活用形のすべてを列記してある。例えば「為」の部に、

ス	本
スル	往
シテ	目
セヨ	来
セン	伏
スレ	

(原形は2.8×2.4センチ)

とある。例語の所に活用変化のすべてを併記するのは同時代の語学書には例がない。ただ譜に

飽	カ
アクキ	クククキケケカカ
ケ	

(略記)

とあるのを見るだけである。これとても単に活用語尾をつけただけで、接続する辞がない。記において、例語の所に全活用形とその名称を列記するについてのヒントは譜に得たとしても、さらに発展させた形は記における新しい試みであろう。

(3)ここで見られる接辞について見る。真具は語の断続を「きるゝ」「つぐ」「つゞく」といい、主として現在「終止形」と考えられるもの、「連用形」の名詞化したもの、および、詠・打合を「きるゝ」(注2)に入れ、下に「あゆひ」または体言を伴うのを「つぐ」としている。その「つぐ」詞辞については、たとえば往についてみると、て・つゝ・し・けり・き・ぬる等を接続せしめ、各語の往の所に併記の形で記入している。次に、当時の先行書の活用形の該当欄の接辞と比較する。

真具	成章	春庭	脛	脛
て つゝ し けり ぬる に なん	(ナシ)	て けり つゝ き けん なば ぬる しか	○下トナラベイ フ ○キケリニツマ ク ○ヤヌニツマ ク	下ノ詞ト並ベ云 キ・シ・ケリニ ツマク・アリ・ ツ・ヌニツマク ○ホスル意ノネ ニツマク ナカレノコ、ロ ノナトマリ 転ジテハ体ノ詞 トナル作用ノ詞 ニオナジ

あゆひ抄には右の辞は「何て」「何つゝ」「何し」「何けり」「何き」「何ぬる」「何に」「何なん」などあるが、記を中心に考える順序不同であり、あゆひ抄に基いて接辞の記入のしかたをととの

詞乃多図記について

えた積極的な跡は見られない。次に、接辞の施された各項を右の様に比較してみよう。(説と譜はいずれか一つを出す)

記	八	説
こそに打合 くれ 打合ぬハ へバへど なとつぐ	こその結辞 ば ど ども	(毎)○現在ニテバニツマク ○ドニツマク ○コソノムスビ

(居靡伏)

(居引靡)

記	八	譜
引广ハつゝく詞 くる人其外名 何にてもあゆ ひをつぐ事 や・か・も・ぞ・ 哉など	かな まで に を より	○下ノ詞ニツマク ○ハモガニツマク ○ヨカニツマク ○ソコソニツマク ○ラニツマク ○ナリニツマク ○ソノヤ何ノムスビ

(居来)

記	八	説
ぬん	でず	未来ニテ バニツマク

ず	じ	で	ば	なん
	ぬ	ん	まし	
				〇ドニツバク 〇ズニツバク

以上、詞乃多図記の往・靡休・引靡・来の四部の接辞について、
 他の語学書の該当欄と比較しただけでの推察であるが、記に及ぼす
 影響の最大なるものの一つに八の四種の活の図があげられるであ
 る。

(4)次に誂・打合ということについて。

誂の時 居よ

て 同うて 又うてば ともつまく うてよとハ いはす

などである。打合については、他と比較すると、本居派のいわゆる
 「係結」と同一である。これについては「欄外記述」の項でふれる。
 誂に該当する欄が成立するについては義門の友鏡（文政六）に第五
 転の外「使令」が設けられたのが最初である。友鏡刊行二十三年後
 の記にはまだこの欄は独立の位置を与えられていない。

(5)その他、詞の自他にふれる面がある。例をあげると、寝（ぬ）の
 条に、ヌ・ヌル・ネテ・ネヨ・ネン・ナス・ヌレ。そして、来（^{あそび}来）の部
 にネンとナスが併記してある。同様に思にオモホス、落にオトス、
 越にコヤスがあり、以上四例に限って装図通りに活用語尾が「な
 「ほ」「と」「や」を併記する。自他については路に表があるので
 これを見ると（同書・上・六オウ）

おのづか ら然る	物を然す る	他に然 する	おのづから 然せらるる	他に然せ らるる	おとさるる
おつる	おとす	(中略)		(後略)	

の例がある。春庭においては動詞の自他は同一語が活用現象の差に
 よつて生ずるという考えを一貫させている。記の方は自他について
 は、寝・思・落・越は同一語、その他は別語として扱っている。こ
 れについては欄外記述の部で記す。

(注1) 「この葉しけき山の奥ふかく分入むたつきともかなと
 おもふのみ」(傍線筆者)

(注2)

う 凡本末ハ きるる詞也 あゆひハ ハとハヤハベキ ハらしなとづく
--

(寝本) ぬ・一夜ねぬときる也。(装図のよみちがいか。)

(見本) み・かへりみ、ころみときる也(運用形の名詞型) () は筆者

あゆひ抄おほむね(十ウ)に

「事のきしかたはいひかためて名となれるあり。これをきしかた名といふ。うらみかたみやどりすまひたびねのたぐひなり」とある。(濁点は筆者)

(打引靡) 無广末はきる、詞なから广にわたりて打きぬたたと

く、(後略)

富士谷成章全集上 p. 553 に (以下「全集」と略)

(末) 捨つ ↓ル ↓時

(末) 思ふ ↓思ふ ↓○ ↓時

(以上は本表欄内記述に見られる上田真具の「きるる」「つゞく」等の説明例である。)

(注3) 欄外にある例

上 下 植 定 責 加 捨 同

あがるさがるなどいふは打部(捨部とは下二段活用・打部とは四段活用)

○欄外の記述について

(1) 欄外右にある簡単な記入は記の性格の一面を表わしているといえよう。まず四具とあつて

名 脚 挿 脚 装捨来 脚名 脚名 脚装捨住 脚 装思末 脚
月夜にはそれともみえず梅の花かをたつねてそしるべかりける

詞乃多図記について

とある。四具は「かざし抄」「あゆひ抄」の二者における説明が少し異なる。(注4)

A かざし抄上・題・二オ・明和四(一七六七)刊・B あゆひ抄・おほむね上・一オ・安永二(一七七二)刊とすると、

A・ことばにみつのくらゐをさたむ。ひとつはかざし。二にはよそひ。三つにはあゆひなり。ものの名をば。このみつのうちにいはず。名はそのものによりてしらしむことやすければなり。

B・名をもて物をことわり。装をもて事を定め。挿頭脚結をもて。ことはをたすく。この四つのくらゐははしめひとつのことたまなり。

り。() は筆者)

右の——の差は著者成章の学説の史的展開や、あゆひ抄、かざし抄それぞれ説明の目的によつて性格を異にしたと思うが、多図記では後者Bによつて装に於いては、かざし抄にある実例と異なり、1装捨来・2装捨住・3装思来など詳しくしている。すなわち装についてはさらに下位分類を施しているのである。竹岡正夫氏によると、C かざし抄上四オとD かざし抄書入本(全集上 p. 30)の差が次にある。その一部を掲げると、

C かくしつつとにもかくにもなからへて……

D かくし つつとにも かくにも なからへて……

とあり、Cにおいてはごく大略を付記するにとどまり、Dにおいては装・脚の下位分類まで完全に付記している。この点、前記記の付記はCとDの間を行き、まさに装図解説書たる特色を示すといえ

る。なぜなら記においては四具の分類を施し、装についてだけは特に装内部の所屬を付記しているからである。四段活用を「打部」、二段活用を「捨部」で代表させ、例えば

鑄着似試願居 見同

入切なとは靡にあらず打部也

いるゝきるゝなといふは捨部に入(―は筆者)

と注している。なお、本屆派の四段活用の例語として打一語にしなかつたのは思に「おもほす」の形があるので、特に思の例語を設けたと考えられる。

(2)「上」にアグル・アガル、「起」にオクル・オコスなどかなづけし、「アグ」「オク」としなかつた(つまり動詞の基本型は終止形でなく連体形であらわす)のは春庭に通う点が認められる。八では活用表において起の活用の終止形には「起く」と示していながら、語例の所では「おくる」としている。また前記路でも、自他の表のところでは基本の型に「おくる」としているのが認められる。初學者にとつてはこの方が理解しやすかつたのであろうか。(注5)

(3)次に往・目・来(まゐり)についてである。欄内「居靡伏」の部に

往ハ過去

目ハ現在

来ハ未来

是をきしかためのまへあらましと

いふ

とあり、その下の欄外に、

「後世し文字のみ三世をいふ方言往目来あり……(中略)……いふ

れも往目来あることを弁へし」

とか、「緑・摺・塗」と「経」との混同をいまして、

「末の靡のると混し安しよく往目来を考知へし」

といつたり、「早・立本」の部に、

「か・此かの字を有のあにかへて往目来を定むへし」

とある。「早か」を「早くあら」にしてそれぞれ往目来を考え、それを以て活用型の異同を知れというのであろう。上田真具は、装の低位分類法の一つに、その往目来を考えて混同を防ぐようにしているのである。春庭が路(下三十七ウ)で、

「四種の活詞をわかちしるには其うくるてをはを以てわきまふるか肝要なり」

として、「ん」のてにをはをうける時の動詞の直上音と五十音図の関連から諸活用の分類をわかりやすく説明したり、

「んのてには四よりうくるは下二段四段は一の音よりいふ」

(同書四十二オ)

などの歌を暗記させているのに比して、記ではこの点「往」を過去と説明しながら、実例では「かへりみ・こころみとざる也」と混乱している。(欄内の記述(3)でのべた)要するに、春庭が未然形に注目して活用諸型の分類をしようとしたのに対し、記では過去・現在・未来の時に関する三形を以てそれをしようとしているのである。(4)打合について欄外左上左中にややくわしい記入があるが、要点をまとめるとおよそ次の如くなる。

一、一定のもの

④ナニ・イカニ・タレ・ヤ・カ・ソなどは連体形またはまし・

らし・しなどに結ぶ。

④こそは已然形で結ぶ。已然形はエ段である。

二・特殊なもの

①係のない文末のみのぞは「つむるそ」といいかくす打合。

②係のない文末のみのこそは「つむるこそ」

③係があり結びのないのはかくす打合。

三・その他

哉の直上には連体形がある。これは引麻(本稿欄内記述の部)

に記入してあるので不要の説明であらう。

(5)欄外左下の記入についてはすでに本稿概観の(注1)でふれた。

はじめに

「脚結抄大旨に此抄をよまむ人装にくらくしてハ心えかたからん

と云々」

また、

「本抄なくして僅十六点のかたかきになすらへしるされたり。初

学の人これにまとも多かれハ其二三を加へて」(以下は本稿

(注1)につづく)

と記されており、記が「あゆひ抄」を理解するための手引として作

成された旨を明らかにしている。

(6)「弘化三年」(一八四六)のことであるが、詳述をさけて、それ

までに刊行された語学書の中で本稿にふれたものの成立年を記す。

○かざし抄(成章) 一七六七

○てにをは紐鏡(宣長) 一七七二

○詞玉緒(宣長) 一七八五

○活語断統譜(眼) 一八〇三

○詞八衢(春庭) 一八〇八

○和語説略図(義門) 一八二三

○友鏡(義門) 一八二三

○詞通路(春庭) 一八二七

○活語指南(義門) 一八四四

ことさらに本居派のもののみあげたのではない。富士谷派には、右

にあげた様な活用研究の書または折図の刊行がほとんどないのであ

る。右のうちのどれを上田真具が参考にしていたかは、その藏書目

録が発見されればさらに明らかになるであらう。

(7)欄外左下に書林の名としてでている天王寺屋市郎兵衛は、竹岡氏

によると富士谷派にはなじみぶかいもので、板本北辺成章家集(弘

化三年)、あゆひ抄初版等に平安書林、寺町五条上ル町天王寺屋市

郎兵衛の名が見える。また御杖自筆の天王寺屋市郎兵衛宛の借金証

文が残っている。間接的にはあるが、発行者の名から著者上田真

具の富士谷派における位置をうかがうほかない。

さて、最後に記の意義についてまとめをする段階であるが、本稿

は資料紹介の形をとり、しかも詞乃多図記一種一本のみの閲覧にす

ぎないので「論」や「考」は後日を期したい。竹岡正夫氏の大著富

士谷成章全集上下の刊行についてはわたくし如き入門者も大いに恩

恵をうけている。本稿で装図に関する記事のすべては右の書による

のであつて、あるいは浅学のみちがいかから誤りも多からんこと

を恐れる。また活用表研究の内容については古田東朔氏の二論文

〔国語学43・「活語断続図説」から「活語断続譜」へ・国語学45・「八衢」へ流れこむもの〕に負う点がはなはだ多い。あわせて深く謝意を表する次第である。

(注4) この三具・四具の差については全集に竹岡氏の詳細な説明がある。(p. 527-530)

(注5) 八(上十四ウ)

中二段活

ス、グ、ル 過	ホ、ク、ル 起	ず て き つゝ	めり	かな	ば
まし	ぬ	けり	らん	に	ども
し	ける	なば	らし	を	
しか	ぬる	(く)べき(くる)まで(くれ)ど			
		と	と	より	

(、、、は筆者)

八(上二十四ウ)

中二段の活詞 此くるを俗言にはきるといふ例なり

〇いくる 〇おくる 〇すくる 〇つくる

起

尽

〇なぐる 〇よくる

路(上五ウ)

中カ	お、く、る	四サ	おこす		下サ	おこさす		下ラ	おこさる
----	-------	----	-----	--	----	------	--	----	------

(、、、は筆者)

(注6) 「前略……心えかたかるへければ。いさゝかそのおもふへきはかりをここにはいふなり……後略」(あゆひ抄一・おはむね下・八オ)

(注7) よそひ本抄とは全集上(p. 1021-p. 1079)によると、よそひ抄たるべき書の証歌を集めたもの。ただし、この「よそひ本抄」とは未見の「よそひ抄」を指しているであろう。

— 昭38・2・11 —